

天正記

五



天正記第五

内官



若ふこしはみむえしんはえらんてくんとす
 せらんとのきんもつて志よくおかく君ふさよ
 志ゆりくまんきよま志ゆなり統政一母業後前を
 秀おんゆら天正三年に春藝列ついでつ乃らぬ
 一佐列をれつりけつりやうなりしよ知日向
 乃りとも若赤行長將軍を討ちりよれつ子の大将
 といくきひくありし軍きくはくまよえうしす
 一その色はそふらう乃らけいこ母てうれへきう
 志ゆりそあうくししおしやうらくとこしく
 志ゆきらうけいおんしとひりかーつうきひいん

よくす信ち志由しやうの城攻められまう天
志ゆゆうし一臣下れすいひまたすけ志やうせん
所あてそこなきゆきむらうせんるりこれとい
て思ふよりみゆひてゆくきやく第一に船款あり
ひくゆりしうこれをもめ事しひれいひさちう
まんまりつるう故まさんし強なりくささ致く
くまん井よぬまうぬくうれこもるり六月二
日信吉父子志やうらくれこもるりあきら日向守
遂立城くはたて是とうちもこしあまのさる二
系乃河永よみうれ入らうまふの事せん代み
せひかなふみ才りり送処り秀吉あ國せいし
して倭中一國款城を承ことりまさひひし料す

つるをぬふまうで何日とるゆすめ志一れい
こもくこらうこもり天下の太平小志よとす
あま津永右せんまやうゆうな小まりのうま
志うんせしうりまるところんつれ幾せんきうり
りくうの志くドさるり乃末うさのてせうせん
再志よしやくが志やうの義にくく天氣いや
の志ゆゆの件
天正十年十一月三日
左中一将 左判
口せん業
上あふ
せん海る
大綱言
天正十年十一月三日
せんし

をあのるをううとてこころして階れ階れ本一あり
よりあのしく、所んせりらういおおひてあしやう階
乃階れとらそぬうくるとらとこれつれうよし
まらまら階れ階れとさうとていけいをふらけう
みんなまきやうやうりんとをせとてさやうまん
とせらうれ階れをううとて階れう一平物信来者
う凡ふよと何ちやうしてさやうとておやうとて
をとうんといしてさそふおまのて又用大信小
物書つり

平のうのうし秀吉

控大細之

坂原の信

あひらん せらよく一筆のりれ人まあし

内大しんよちのきりじりとの

天正十三年三月十日

かりんのうとけいん大りふみまのちぬわり中一原

とろりや

あひ来たいを張子千あは太刀一ううとてすくめ小

まのくお座お給るらんやく又あんなうしはく

ぬ劔成るころれ一せれを海なり

又 信長將軍二男織田三助信雅さううふあん

がーそーふまやうたふのふそいさまあんなあはれ

あんみうんすたしんとお天下のまうり事とて

まひるとののまは太坂へらよくとたてくうん

たいをひて 水れ政取よあんなやあは太坂政取

志やう河のくりに夕ひをわんふらんはくひれは
見さ大はくみふありむをまよくとはくしのみか
人のんしそ赤色い染るゆも志みらふ志る色
とこししはふ謎よ末代のひびくまりさるひく
たのもしふ村ぬありてあき流るよものさふおはる
志るはりの流のししくもをるしりしは水そり見よ
ふより上下志るの葉のめ乃ありひくを流るの
たりしそ志平海よありてすす水なれあり流る
としひさをり流す事しとえを傳て見初流す
あくあつてふをらそなりし夕日せうりん
志ひすそやう風こより入みか人くひいさ流
色う個くんめあそまきうるひくまりおつりといひ

とらげたひ志のけしし流又うく日又く

勅使くしりひりくあり

昨日系内まきしこしよすうこししや日まれく
くおりのひ流ひのむめむとんむ流すく海まは流
流流まられゆるけくしりひくく休ありしそ
さいくまらむるしりひ流るん志色ちる大細言
中しまりしせん 園白ぬへ 舞志ん王志色
こうれ川産ありろむの事 殿下乃ひりんととけ
ら流つたりし義らやう大城りひまきかたう上の
流るし切りしひハ十うん志ふ七歳とうししり
りし流色しとくくもゆうらひつり志りまやう
志よくたり流流りひは舞るし 禁中しり

おつて志つりまうしんばくといーホッしんごのあ
はらうひ川のそのまわりをむん又たけししひく
しぬ下物の里にきてさひけうあさりのなりは
年一よれつしそらんたひくうアし兩せん香う
てくししとぬ今日くさしさうアア由 志い
アよ酒ぶらんししたてまつるなり 勅書
つし疾宗凡目錄おまられれりん 志ん王一の
さうゆうろんバるりさうアアしは終る産かとの
まーろくさうアアのたんはぬせ定められり下
ねくアふまられれろるくは

園白ぬへ

志ん王の志ぬあうさつふれ幾びくさうアし但

まう志んやゆーんとのや自録ふ志ん口うるは宗
あのあ人き物阿なうるれくそとのく産初る
想きまうるり

一 同法るり乃儀ろふふ乃志ぬこれこく各く
産書一とるアし

一 お園白とが川中一の志ぬこくさうアし
が川中一の志ん王同前

志ん王一の志さうろんの事一古今一ふがふその
契結ろんと大越ちまうついとよけ志んをけん官
らんとりとめまう志ぬ或を宗本のまうふとひく
つそくくくひ志んせーの志三ヶ条志ぬとく
志のなりな代志まやうたる志さ志ぬのけ勅書

かきれり法治是とるりるり下結法門より法也
ふれきりめおりんいよくあめ法をばもら
つたものあり

天正十二年七月十五日

圓白

ちん王

佐見殿

仁和寺との

志やうきん院との

ぬやう院殿

かし井との

志ゆこう院

遊湯殿

九てうとの

一てうとの

二てうとの

たり法のこと殿

くりん志ゆう志ゆさふ

志やう権院殿

大ひくちとの

三ほうりしとの

勅書

菊てい殿

くしん志ゆうる殿

中一山殿

若原中一細言殿

志の氣一つふわてけりいさるく古来たのりん小
多のきすたくのり法定乃も一志長わうたのり
しすうゆへりり今養園白の義をこさるらよ今
子の加修小むせの院のよたつり付てあ志よこ
よやんを云々標志ん王ぬ方こうさひよるひこ
ろしして極めまつりあともけくろりなりしん業
きん法とけけせいもくせりややりぬ下山
くふう門是院の志ゆせれとりこめ古今わうん

そのあまのいひ在まうしうふれあまりすううまきと
ちんらんすまよりんもつともあさこころをしし
あまなさる

こまねおきていこのよてとぬのびろふのてう
わう淨心ありのほと一かなりめへは練う
おりのひよられ候るやあま志作儀志由うちやをさ
清くまなもとてそ中ほくししくこまねのらひ
見糸のかりかこまら入候けらま有りなり

中山大綱言

図白版

御判

右の外ひよわうあふくそんちんすんううすまり
つうくちんりの義さやうとみくなく大平善人
まやうれ志まこんまううす天神地祇いん乃出

てい名おあさうたんらやうまのそう乳小年月
ひのこのごり二月六日若るや志のう志ま切ん
ひんましくししうわたりまこしひおま又そ天珠
のんと見れらうりて大福方あさらんと風れ
ゆくういしし又まこそ極はこもるうひ
かのふおおやうれうせいとたのわらまお又そ母
まんなりりらも義中細きまやうりつたの
大政所と力二さのれ秋のあ人あゆうけん
うりてをんまそまよまれ尾列ひが村まといふ
旭うのまきまき光雲秋波おくり結ふまこ老う
おひくまよ村まれまひおお教の人一志ゆてまき
なりのあをれまこの母りひうらま

つゝ我らはいもう去せ。りりり

の凡中一おうんのうこなるつれ大政承とのわざ
なふと一ちやうらうりあり 禁中一のつゝ
るゝもやらのへしのみ事一二三年一々下國
もそほく月く一子たんにやうを今の天下のたん
魚い張らるやの魚やも他大后小及す又平家
のつらんさよそり公大らやう大らん一らん
あきとよふらんさふれい且道のつととひつやうす
へし然る一らんあ乃うせいふせい又書とまらん
さるも一とくのみ只今ちゆ一や成まねる救を右傳
詠歌乃あひはくうこれとくくりんあやうとす
せん流りちゆる事ばぬししゆくおおつしりん

ゆりのり一有原のちやうと清園白ふらんともう
あふとせいのりごとつととこたうらんまふと
足つくあことしし天下をたりり末代一むつり
たぐわくたふる川れちやうとまきんちやをさる
へしさりなくつと理よりなハうるよおつしきん
のまを考へしつゝ一へ源平とうさるの志一やう
るれ人入さるやうらうらうとて一ちやうく先成
せいすらぬらふちけく乃一やうせん志約信と
たりり一つてこれとささげらる今より一所々九百
二十一年とらもな 皇族の約信を移えけり
てあきとよふけら八百五十年
るのけくせんびとんまふおつゝ原のあん玉けり

ついでにまた城を築くは百十年
天皇の御長多田のまんらうれ又ついでこの王ふ
りしめを築きと結する七百又十年小及ふけし
な城のくわしし今まも築きやうとありはめぬ
定なりしは町ありしおひて菊ていれ右大臣
志らくありふこう中やうを築きやうとこれ
すしよめてさうらんといは傳てらふししまこひ
祢野う延天長地久之やうを築ふ万らんくわい
らくとうれらんこもしふりれらんましくは志ん
てこれとあるす

天正十三年八月吉日

それ久岐の夫ひうけりての地をまはりて

もろとあのく、祢代のく、月とようへすしつへた
そ建ふ傳へりたりと人五人らやう祢武天皇
乃るの志んらう天正十六年今ふつては也せい
志の百ん代といはう二千二百三十七てうていの
まうりあともまきれたのつとく人まもやうらん
のつとめし松乃葉ハラりう勢す中へりはつそ
こん義のてんまやふれしうんひこ世まてりし
しよぬこいものゆへりりつたおまふひてたこも
るよしはうといへともあのあつとつあひひこ
なり結託も園白大臣大長秀吉とうれくひあや
をれりうへともう人りし色知りのよ
るしあふれ河原ありてとういとたへらませい

こつとるり所をうまひに小山敷とよゑの
十五年びろ町とのこゝゑの九年に於ての礼とそ
さうくけらむうまひの初りの礼やく以下れる
も久しをすれらる事なりれと御不仕のなりと
いッへたらんふまやうけんい奉初と一して徳義
れ右記ろくあしちとおたつねさくらこれ所お
信と免くこれ大町にまたう押一びつたよめ
とびう一のまやうのうりそうい一とらふ
すんしとそとまやうのうのう押がでてう
よてうらんせしぢちさももんせいといるる
なふよふさうりさてまやうらんを忠らひ三月中
志のこの何ふり一と忠ししう高年を又月うるふ

わがうりまうてやとまひんとう乃ととをよして
秋のん一しながもかりこまこまれと御侍中
まそう一めんころうれ目おまりぬまを取下と
うん終てゆさやうのうか一とつてあききん
ひさ乃とまよりのあ乃のうさうつを結ふと
もろまふひの西面れはと一とさうりうふよ
せいよのいくささうきんとあししうらんあら
下系川とよこらんのと結るそ乃取なれとたま
也御不仕定められ奉初をしと由をうまれ
なん天り志の川まよりのけうくまの御衣ハ山
もとまなりはぬまをなうり一乃結所とまあま
えんたうあさとししと取下はもとととりぬ

はやう乃りこころんへい誠はせじけりささるふ
礼ホもまいハしこしぬ下ちやくとがうしして
ちよくこころのりこしはちふはらんりらとくハ
おんまふあつらん次ほうまん乃三月乃る小
よせて丸右の大御所つふ以下まいのこくつや
免らぬさそ四わ乃のつと水へおぬさ町とくへ
ちゆらく流さそ十回又町うれあひさそを所し
町の六千餘人なりまの志ほう乃信とわこしと
國母乃しゆこころと女こ乃とあしとけりめたすの
の約ぬ信が祿を外志やうりうたらしこしし三十
らやうあまりみおとこまんなりをんやうへ
百余人清くものまうしそくこさすあふもれやう

有りゆるとふ——十回又らやううり六家此御の
佐見友 九条ぬ 一条友 二条との 菊亭との
右大後あまてんこ 徳大寺乃用大後
あまか井お大納言 田川志前大納言
大井乃所門お大納言 くらんちゆち大納言
中一山大おめん白三徳さそ約け流しをゆりとう
左 せんき
遊人 中一信くささる助 上志のゆ人
さうへ二人 雜織三人 ゆん人くさりら
とみ乃小治大衆の女 松本信塔 礼せん信後
おがさ町乃おゆ 柳原家内指大彌女
うんろし くらんしうちる厄が

出山門と海北佐

くらん部と侍従

せやく院の侍従

持本此中一将

西と入り心丸兵衛女

右

ひろ持来と一若原

くらんと一とよ乃射

阿野侍従

右田侍従

冷泉の侍従

大津の侍従 ひろとハ乃侍従

とと丸乃侍従

しひろバと中一とるん

三てう乃おる

又川しと海の歌

又てう乃大内記

次道清次

丸

うれと少将

六条の中一とやう

中一と中一お

丸

四条少お

みおと乃おる

乃と加井中一将

次お

万葉小治比乃少と乃

乃りしと

中一とらうしとやう

とそへ

又ととやう

丸

さびりさ大納言佐よとの口

とりまよと侍

雑織

とそへ

ととととら

右

西抄に大納言のまひり口

同お

以まい人 田十人 桑原のうらうらふと

つうまん

おぼ

あうらうら

次でくい山下やう人

し次

左大臣信満公 治大夫

ふ家約

忠信一さ

同大臣信雅公 同お

あうらうら

久我の太納言

日比く大納言

小右の源らう納言

三之やういん中納言

ひの橋中納言

おのさ町の中納言

をい中納言

坊機中納言

法大まよいしん菊亭三位中將

花山院のいお

といし三条のいお

右田九条の女中

右末門助右衛門

佐治のいお中納言

徳大ま さいふん

園白ぬ

せんき

うした右末門尉

已下 福原右衛門

長谷川右兵衛

右田兵衛が備

狭坂のいお

契のや内膳正

又川右のいお

池田佐中守

海田島書女

中川茂盛守

伴友舟後

小室本ぬい乃佐

宇田少んこ乃

まきさ藤人

まきさたさうのち

お井橋保う

一柳越こりうと

尾代志のほまのち

しつとりう終めのち

石河出羽うと

まやをいせん乃あそ

いらほしんもあされうみ

いこまとのその守

口乃うんあのみえ

高谷大膳方よ

いなりし長つのみと

まへれたし海乃ち

右

平野おく井佐

ころ口くうさち

赤松厄兵衛尉

中一河赤河太夫

本下ひ川中一ち

くま大すえのち

せた乃かりん

あますま内お物

紫山々しりつ

とみく丸逃将らん

ワ一た信部のみよう

あきれうきやうのを

見れさうの中一とよ

あきまり赤帝

まつとりとさのち

こつこもるまのち

あふのお羽ち

松浦さぬまのりえ

てらさわ越中一ち

あどつとつりのあそ

初取えんとりの守

うさやおされち

大谷さやうふのちよう

しきりさゆきんあ

佐藤むさ乃うと

生駒志ゆまのすひ

さくさ石見うと

ワ一かわつりのうと

い一たきのうと

すくまつりさのりか

ひらみまをふのうと

あひさあん

山されし後のうと

ひんてうらうさのかと

はちり肥後守

また村兵小比奴

ちんてうすうかの守

ちらや大五郎大五

信之集人正

愚りこ下野守

ちうた織甲正

ちく山さく比うと

赤かつうまやうのちん

本村ひたらののうと

雑織丸右

三十人

ちいしん

丸

丸右

丸福志やうをさき

ちりみん田大猫

のじら肥後守

本下左京助

丸

まさ田とんくの正

中村左兵衛尉

こやみつひれうと

田也

一柳右衛門太夫

小出信濃守

ワしたもくれうと

三の

互色ぼり

うらさきぬ

ひえうん乃

うしし

二ひさ

しまりら

をほりら

あ人

うーしこらふあ人

あえとさけのまゆとほり

あつちやううくうすいけんなりま車くれお井

れきぬおぬいとせれとるなり叩しらみおもて

とりのまやうれけの孫倉うてくれとたまくい

まきのさまのしをもちてこれにぞうくれお井
のそははきてしうせひまのさうししもしやう
うくは月前ひしれまいふあしす清とけりは車
う急急はしし救百人

ほ次

加賀がねはり家約長

雑織

ふそん

ふ志

しこりりあのちり 月前

津伝送のふしき乃長約

乃んくの少将ひくうつれ約長

三河ぶぬ赤康のつえん

三麻伝送ひてのふ

金治のししらう

は虎れししらう

尾赤の伝送ししを約長

東口の伝送ひてうつらうん

水志やう侍送ひてまきあつうん

雲の傳送定心つらあつうん

たんの侍送たかくおき約長

三吉侍送たふひてあ川うん

河内約長秀まきあ川うん

修らう侍送らうしあ川うん

越中ししらうひまうつ約長

源又侍送たうまきあ川うん

ふりきりしきしきとせんとうをぬふくまきめいこう
しみのあきしきとつとらりやうてうらへりーや
がういままのせへをけりていさりすうんたら
へてん上人のんま乃越うやとらいたこふ及下
四わしの門おりてせのひぬるまよきよをばり
たまふがまよきよのせのひぬるまよきよをばり
とれ及下とすうれうちろるるさきよをばり
とさうてぬきよとせしりーあつてまよきよを
そまぬひてぬ及乃まやううくまよきよをばり
せこりりて及下まよきよのひぬるまよきよをばり
たまふしよ及すありのせのひぬるまよきよをばり
いんいせれぬ

しゆちやうはあ

三系とへしやう中へおきんたうの

六とやれ清前

くもんしゆちやうのちがぬんうつとよ

園白との 依尼との 竹うれ 持家

さいとらホ

はあ

又系朝吉の御居 田舎らす人光の御居

わすか井まこつひのあつそん

六系うりらうれあつそん

けしとまれうひかたのあつそん

あつししとたのあつそん

まのとうゆんとまのふれあつそん
まよふんのゆかりけりまの清氣多かりきんあん
まを天もい天ちやくみあんすりあかんひつこ
い進上せめんまをまよふん進上とりくはま
りかくこきりお金銀のけりりまのおと巻るハ
かうらひのし海子けりまのよまひおけのまよ
まりゆくすま千年といわひまへまをねりり
まのいんりていあかりまのほさらやうとあけさ
せい海ましままのま本まままをりあまわり
乃かりおおそさくけりまのままなまのゆま
のこまままよてうこりまのま目乃けりまのわ
ふまてままのりまをねえまをまこまをりあま

いんまのりまのぬゆよとまをままえり

伊人数十八六人

一 せうり ぶらやうりく 二 高ぶ ころまよく

三 高よ たいあいらく

一 高うのいし 伊水伝を介

一 系取 四川しし大細き 小のこ中かあん

一 田けし中る 乃まが井中一ぬ 五人

一 ひま 中一見ぬ 菊亭の

同三徳中ノ将 五人

一 三やう 大炊の西門大納言

一 上も 五川と丸る歌あ人

一 ささく 四徳一 お六歌ま

さるる院中一なるん

ふりかへるり

あまきや三人

垣 是 水 ちん らん やうりし二やく

うん 尚 菊 面 松 花 又十うん

はをとりうゑのししたまふなりいあしくの志

を乃中一するこ由上れ結つたをそと疎文一うう

まこいぢれも莞一とへほさげらぬういいせこ

すへる一さんすうあこのじみられれ松りきあつ

ほされ水乃ま入れぢれさうくくあう海もすん

わこまてあまらやと免乃ねもくさ然アがおろ

くそまよをとりりてり然だん口いふびくくさう

うしやうりうあなる海ん一もおやうのめうら

まこひおひ一あもあ一やうんこひらまゆ

とひ一ふの一さようぢまう

あ下もまやしんらん一うらまたまふがやの

うる海申一乃まふけねん一うる有り次れ口り

あまやう人集て契約ししをり海前一いこめて

三日乃の孝とまめられしうととあさりふれ致

多一セツし又目とくめまあ一し然も目出たさ

近代一りのひなてまうるる天乃ぬこ一りて

入初孝は代乃たう一もあが一りてうてい

いよく一さのえつてはねいるわう進みはつて

まん中一正色つれはあふらくらうハ地ししこ

くまきまらたのしんらんしぬひてうれけ状の

又りんく云

今交志のりくめわうに付て京中一限珠子又ふす
百三十両餘より禁中ののうりとして諸海系を上
ししを以八本八百石より内三百石の陸津所へ是
を上陸里を國白くやうとして六交友へ是を志ん
ししは諸中一地子おのころひも志んらんを以
詔公家法門に遊に國よれつて高津郡ハ石初乃
朱京所のくもい少んぢしひるそのや志んぢり
こうに志ん紫のわうハ志んまよとてわひも
これあうこうと付付ら海懸き老やの状の件

天正十六年一月十日

秀吉判

天正記書才不終

110 X
323
9